

『浜松中納言物語』における皇女降嫁辞退について ——『源氏物語』の苦悩を踏まえた展開——

朝 日 眞 美 子

はじめに

『浜松中納言物語』において、今上帝が中納言に承香殿女宮の後見役をせよと、降嫁の意向を示されたのは、中納言が唐土での経験を熱を込めて語った後であった。この時の帝の仰せは、自身が帝位にあるのも残り少ない氣がして、頼みになる後見役のいない承香殿女宮の行く末が「心苦しう」（巻三【五〇】、二七〇頁⁽¹⁾）思い遣られるために、中納言の人柄を見込んで、この女宮を彼に託したいというもので、切なる思いがにじみ出ていた。この突然の仰せに対して、中納言はどうしてよいかわからず、「かたじけなければ」（同）ともつたない仰せとして受け止め恐縮するばかりであった。その後、中納言は内裏を退出し、眠れないままに自邸で、降嫁の仰せについてどのように対処するかについて考え続ける。そして出した結論が、あろうことか「辞退」であった。

平安朝の作り物語において、皇女降嫁は「最高の榮譽」と見なされる中にあつて、これは異例ともいいうべき展開である。『源氏物語』の光源氏も薰も、辞退の可能性など考えることなしに皇女降嫁を受諾したのは、降嫁の榮譽に沿することの重さを十分に承知しているからであり、この物語の影響を強く受けている『浜松中納言物語』における中納言も、この点に関しては例外ではない。それでもなお中納言が降嫁の辞退を決意するという展開をとるからには、読者が納得する理由を用意することが作者には求められる。作者のとった解決策は、今上帝による降嫁の仰せのあつたその日のうちに、降嫁を受諾した場合に生じるであろう困難について中納言に徹底的に考え方させ、尼でありながらもまるで妻のように同居している大将大君に涙ながらに打ち明けさせること、そして、それを描く際に『源氏物語』の光源氏や薰の降嫁に関して用いられた言葉を中納言の思考に採り入れさせて、受諾ではなく「辞退」へと舵を切らせることの二点である。

詳細については後述するが、『源氏物語』における光源氏への女三宮降嫁⁽³⁾は多くの苦悩と悲しみをもたらし、薰への女二宮降嫁⁽⁴⁾も辛い感情が募るものとして描かれている。このような皇女降嫁にまつわる苦悩を受け止めて、『浜松中納言物語』の作者は、降嫁において用いられた『源氏物語』の言葉を再構成して、中納言の辞退の決意を描いている。本稿では、皇女降嫁に関する『源氏物語』の描写と、帝から皇女降嫁の仰せがあつた日の中納言の心内語⁽⁵⁾との比較検討を通じて、『浜松中納言物語』の作者の創意について考察する。

なお、この心内語は長く、内容も多岐にわたるので、以下、(心内語一)・(心内語二)・(心内語三)と便宜的に三部に分割し、それぞれ第一章、第二章、第三章に分けて考察する。

内裏から自邸に帰った中納言は、いつものように大将大君の部屋で横になるが眠ることができず、自己の半生を回顧しながら、承香殿女宮降嫁について思いをめぐらせている。長い中納言の心内語の中でも最初の部分である（心内語一）では、この日、内裏で伺つた帝の仰せについて考え続けている。

（心内語一）

内裏の上の仰せられること思ひ続くるに、^a わが心を世の常に推し量らせ給ふなるべし。^b いにしへよりかやうの筋に、すべてつゆも心を乱さじと、よろづ思ひ過ぐして、^c 知らぬ世の及びなきことに心を染めにしより、^d 我ともおぼえず浮きただよひてのみあれば、^e やむことなくかしこき御あたりに、御覽ぜらるべきやうもなし。

（卷三【五一】、一二七一页）

先ず最初に中納言は、傍線部 a 「わが心を世の常に推し量らせ給ふなるべし」と、帝が皇女降嫁を仰せになつたのは、自分のことを他の一般的な男性貴族と同じように皇女降嫁を喜んで受け入れるに違いないとお思いになつたからであろうと、帝の心の内を推測している。そしてそれを不満として、傍線部 b・c・d と自己の半生の回顧に移る。

傍線部 b では、中納言が随分前から女性関係で決して心を乱すまいと、恋に関わるすべてをやり過ごしてきていたこと、傍線部 c では渡唐して、成就するはずもない高貴な唐后への恋に耽溺したこと、そして傍線部 d 「我ともおぼえず浮きただよひてのみあれば」では現在に視点を転じ、自身が制御不可能なほど根深い唐后恋慕が、浮いて漂うような不安定な精神状態につながり、それが「のみ」と表現されるほど常態化していることが示される。そしてこのような精神状態を理由として、傍線部 e 「やむごとなくかしこき御あたりに、御覽ぜらるべきやうもなし」と、高貴で畏れ多

い帝に御覧いただいていいはずもなく、帝の婿とはなり得ないという、降嫁を辞退しようとする中納言の判断がなされている。この判断は帝を意識しつつも、中納言の半生における女性に対する思いを回顧する文脈のもとになされたものであることから、その背景には、今なお続く唐后恋慕による不安定な精神状態では決して女宮に愛情を持った態度を取ることはできないので、自分には婿としてふさわしい対応することなど不可能だという、女宮側の立場や心情を慮つた中納言の思いがあると考えられる。

このように、過去の恋愛を忘れることができない精神状態であることが、降嫁に對して消極的な姿勢をもたらすことは、『源氏物語』においては薰への女二宮降嫁の表現にも認められる。薰の場合も中納言と同じく、今上帝による直接の仰せによつて降嫁が表明されたため、降嫁を「面だたしき」と（宿木、四一七頁⁽⁶⁾）とは考えているが、喜んで受け入れるようには描かれてはいない。以下、薰が女二宮との縁組みを承諾した後、その日程などが具体化している状況にあつても、なお降嫁を待ち遠しく思えないでいる薰の心中の思いが描写されている例を取り上げ、前記の（心内語一）と比較検討する。

a 心の内には、なほ飽かず過ぎたまひにし人の悲しさのみ忘るべき世なくおぼゆれば、うたて、かく契り深くものしたまひける人の、などでかはさすがに疎くては過ぎにけんと心得がたく思ひ出でらる。口惜しき品なりとも、
b かの御ありさまにすこしもおぼえたらむ人は、心もとまりなんかし、昔ありけん香の煙につけてだに、c いま一たび見たてまつるものにもがな、とのみおぼえて、d やむごとなき方ざまに、いつしかなど急ぐ心もなし。

（宿木、三八二・三八三頁）

まず、当該傍線部 a 「心の内には、なほ飽かず過ぎたまひにし人の悲しさのみ忘るべき世なくおぼゆれば」と、（心内語一）傍線部 c 「知らぬ世の及びなきことに心を染めにしより、我ともおぼえず浮きただよひてのみあれば」につ

いて、「し」と「のみ」に着目して検討する。

当該傍線部 a の「なほ飽かず過ぎたまひにし人」と、過去の助動詞を用いて表された人は既に薫と死別した大君である。一方、（心内語一）傍線部 c の「知らぬ世の及びなきことに心を染めにしより」と、中納言が身分違いの恋をしたのは過去に訪れた唐土でのことであり、その思慕の対象となつた人は唐后である。

また、当該傍線部 a の「のみ」は、薫が大君との死別の悲しみばかりを思い、それが常に心から離れない状態であることを表現しており、（心内語一）傍線部 d 「我ともおぼえず浮きただよひてのみあれば」は、中納言が離別した唐后のことの恋慕するあまり、不安定な精神状態が常態化していることを表現している。両者には死別と離別という相違点はあるが、男性がかつて恋慕したもの、やむを得ない事情で会えなくなつた女性への思いを持ち続け、他の女性のことなど考える余地もないほどに、その思いに今なお耽溺しているという点においては同じである。

薫の場合は「昔ありけん香の煙」と、前漢の武帝が亡き李夫人の魂を方士に命じて呼び戻して、その姿を煙の中に見たという故事により、反魂香の力を借りてまでも、当該傍線部 c 「(大君に) いま一たび見たてまつるものにもがな、とのみおぼえて」と、さらに「のみ」を重ねて大君にもう一度会いたいとの思いを描いている。そして傍線部 d 「やむごとなき方ざまに、いつしかなどいそぐ心もなし」へとつなげている。この「やむごとなき方ざま」という表現は、薫と今上帝の娘、女二宮との婚儀について用いられており、先に検討した中納言の（心内語一）傍線部 e 「やむごとなくかしこき御あたりに、御覽ぜらるべきやうもなし」において、今上帝の娘、承香殿女宮との婚儀に「やむごとなし」が用いられていることと一致する。さらに当該傍線部 d では「いつしかなどいそぐ心もなし」、（心内語一）傍線部 e では「御覽ぜらるべきやうもなし」と、降嫁に対する消極的な心情が示されている。

このように、薫は死別した大君を、中納言は離別した唐后を恋慕する思いの強さ故に、皇女降嫁という榮誉に対し

て喜ぶことができず、消極的な心情に至っている。薫と中納言では死別と離別という設定は違うが、過去の恋がいまだに心の隅々まで充満しているという点においては同じである。

この『浜松中納言物語』巻三の時点で唐后は存命ではあるが、平安時代において唐土と日本に離れて住み、后という身分からも再会は絶望的であることから、もはや会える見込みがないという点で、中納言と唐后との関係は、薫と亡き大君との死別にほぼ等しい。もう会うことのできない人のことを忘れられず、その人との思い出に浸る時間を今なお必要とし、あり得ない再会を渴望しているという点において、薫と中納言の設定は酷似している。しかし、薫は過去のこととなつた大君恋慕へのこだわりを強く持ちながらも降嫁を受諾しており、このことが帝や女二宮に及ぼす影響については全く考慮していない。それに対して中納言は帝や承香殿女宮のことも配慮し、唐后を恋慕する思いがおさまらない不安定な精神状態では、降嫁を受諾することは不可能だと判断している。このように自己の不安定な精神状態を理由として降嫁を辞退しようとする中納言は、亡き大君を恋慕するが故に榮誉であるはずの降嫁に消極的な姿勢をとり、後述するように苦悩を深めていく薫の心の軌跡というものを熟知し、まるで、その苦い経験から推し量つて辞退という判断を下したかのようである。『浜松中納言物語』の作者は、『源氏物語』を熟読し、薫の苦悩を深く理解した上で、中納言には同じ轍を踏ませないような展開を用意したと考えられる。

二

中納言は（心内語一）において、唐后に逢う以前は女性関係で決して心を乱すまいとしてきたと、自分自身のことについて回想していたが、この心中での思惟はさらに続き、（心内語二）では対象を大将大君や父左大将へと移していく

る。まず、（心内語二）の概略を登場人物の関係などを補いつつ挙げた後に、（心内語二）について検討する。

（概略⁽⁷⁾）

この大将大君は左大将の娘で、母が他界した後、父左大将は中納言の母と再婚していた。中納言は故父宮が唐土の第三皇子に転生したと聞き、唐土に渡ることとなつたが、その前に大将大君と思いがけず逢瀬を持つ。大将大君は懷妊し、式部卿宮との縁談は破談となり、代わりに妹が式部卿宮を婿とする。その後、大将大君は嘆いたあげくに剃髪して出産する。一方、中納言は唐土からの帰国後、自邸で尼姿の大将大君とともに暮らし、彼女をまるで妻のように待遇し、それを父左大将も喜んでいた。このような状況で持ち上がつたのが、中納言への承香殿女宮の降嫁の話であり、中納言は大将大君の心中を想像し、今後のことを考えるにつけ、涙を流している。

（心内語二）

また、その中に、この女君にゆくりなう乱れ逢ひて、ほどもなく、遙かなる世界に、見捨てて漕ぎ離れにし、女の心、いかばかりかは憂し恥づかしと思し入りけむ。心一つにだにあらず、いちじるきしるしにあらはれ出でて、乙姫君を、にはかに引き越いて、宮々に婿取り、ことども変りけむほどを、人々の思ひ言ひけむさまの、この御心地にさしあたりて見聞き給ひけむほどの御嘆き、さまざまに思し続けて、さばかり惜しげなりし髪を、そぎやつし給ひけむほどは、^a心の内よろしかりけむや。また、かばかりあたらしうめでたき御娘を、いたづらになして、我を心やましうつらしと思しけむ親の^b御心の内を思ひ続けるに、この罪この世に逃るべうもおぼえず。やがてそのままに、世を背き給ひにけりとて、立ち離れましかば、さてもあるべきに、このあたりを限りなき寄る辺と定めて出で入りするを、大将も、^c『いとうれし』と思されたんめり。女君も、^d今はさるものにうち解け給へるめるに、並々ならず、やむごとなきこと出で来なむを、わが内々のこころざしは、さりともおろかにあるべ

きにあらねども、『必ずさやうのことありなむ。さらざらむ先に、いかでのどやかなる住まひになりなばや』と、
さりげなう思いたんめるに、『さればよ』とはしたなう思されむこと、^f世に知らず心苦しう、ある人々の思はむ
「」と」を思しやるに、あらましげとさへ、涙落ちつつ、(以下、心内語三に続く)

(卷三【五一】、二七一・二七二頁)

ここで中納言は、大将大君と逢瀬を持ち、彼女が剃髪するまでの過程について考えているが、この間、中納言は唐土に滯在していたため、過去の推量の助動詞「けむ」を用いて、それぞれのことについての大将大君の心中を推量している。中納言が大将大君との逢瀬の後に渡唐した後、彼女が懷妊したことにより、代わりに妹が式部卿宮を婿としたことによつて彼女を取り巻く状況が変わつた時、彼女が周囲の人々の陰口を見聞きした時、そして彼女が剃髪した時を、傍線部 a 「心の内」で受けて、彼女の辛さを思い遣つてゐる。

また、中納言は父左大将の傍線部 b 「御心の内」について、彼の素晴らしい娘である大将大君を、むなしい尼の身にしてしまつて、その原因をつくつた自身のことを、むごい仕打ちをしたと怒り、耐え難いと思つたであろうと、考え続けている。

その後、中納言が帰国し、大将大君と同居してからのこととは、推量の助動詞「めり」を用いて中納言の視点から、左大将や大将大君の心情が推量されている。傍線部 c では、剃髪後であるのにもかかわらず、大将大君をまるで妻のように重んじ、大切にする態度から、父左大将の喜ぶ心情が、傍線部 d では大将大君が打ち解け、安心した心情でいることが、そして傍線部 e では中納言が高貴な女性と結婚するよりも前に、大将大君は別居したいという思いを持っているであろうことが推量されている。

この大将大君が中納言との別居を望んでいることは、中納言が唐土より帰国した当初からであり、大将大君は「か

すかにのどやかなる住まひにてこそよかるべき」（巻二【四】、一二九頁）と、中納言との同居ではなく、尼としての静かな暮らしができる住居がよいと考えていた。また、中納言が将来、身分の高い妻を迎える前に、「のどやかならむ住まひにかけ離れなむこそ、つひの心やすきことなれ」（巻三【三八】、二五六頁）と考えており、それを中納言に「ほのめかし」ていたことから、彼は大将大君が同居を解消したいと望んでいたことを十分に察知していた。その結果、この心内語では中納言は大将大君のことを傍線部f「世に知らず心苦しう」とまで思い涙を流している。皇女降嫁によつて、最も苦しむのは大将大君に他ならないと判断したからである。

以上のように（心内語二）において、中納言は大将大君が出家したことと父大将の悲嘆、そして降嫁を受諾すれば実現するであろう中納言邸での承香殿女宮との同居と、その後の大将大君の住まいの問題、それに伴う大将大君や父左大将の悲哀に中納言の目は向けられている。（心内語一）では中納言が自己の精神状態が不安定なことが降嫁に消極的原因になる理由であつたが、（心内語二）においては、大将大君や父左大将という他者の悲哀に中納言の目は向けられ、彼の心はいよいよ辞退する方向へと進んでいる。

降嫁に伴つて生じる皇女との同居が引き起こす問題は、『源氏物語』においては光源氏への女三宮降嫁において描かれている。六条院の妻の中でも最も尊重されていた紫の上が、「対の上」や「対」と呼称されて東の対に住み、女三宮が東南の町の寝殿に主として住むことを受け入れ、宮への和やかな対応を図つた末に発病し、死に至るまでの経緯は、光源氏に深刻な悲しみを与えていることは言うまでもない。当然、光源氏が女三宮降嫁を承認して六条院に帰り、そのことを初めて紫の上に打ち明けたことも描かれているが、その後の悲惨な展開を全く予想できないでいることが、このときの彼の紫の上への態度や言葉に表れている。

六条院は、なま心苦しうさまざま思し乱る。^a（中略）何心もなくておはするに、いとほしく、このこといかに

思さむ、わが心はつゆも変るまじく、さることあらんにつけては、なかなかいとど深さこそまさらめ、見定めた
まはざらむほど、いかに思ひ疑ひたまはむ、など、^bやすからず思さる。今の年ごろとなりては、ましてかたみに
隔てきこえたまふことなく、あはれなる御仲なれば、^cしばし心に隔て残したことあらむもいぶせきを、^dその
夜はうちやすみて明かしたまひつ。

(若菜上、五〇・五一頁)

光源氏は自邸に戻つて、傍線部 a 「思し乱る」というほどに、思案にくれている。そして、光源氏は紫の上のことを気の毒に思い、そして自分の真情が伝わらないことを傍線部 b 「やすからず」 思い、傍線部 c 「しばし心に隔て残したことあらむもいぶせきを」と、今ここで、紫の上に降嫁のことを打ち明けないのは気がかりだとしながらも、傍線部 d 「その夜はうちやすみて明かしたまひつ」とそのまま寝に就いて朝を迎えていた。ここで光源氏は事の重大さは意識しつつも、女三宮降嫁によつて紫の上がいかに深く嘆き苦しむかということに対して、社会的な立場の面も含めて、具体的に想像するというところにまで至つてはいない。一方、中納言は降嫁の仰せのあつた夜に、眠れないままに考え続け、皇女との同居によつて、いたたまれない思いがするであろう大将大君のことを(心内語二) 傍線部 f 「世に知らず心苦しう」 思い、第三章で検討する(心内語三)において、思い余つて、泣く泣く大将大君に降嫁のことを伝えており、相手の窮状を案じる心情については、光源氏の比ではないほど切実である。

光源氏は、やつと翌日になつて、重病の朱雀院が娘の女三宮の身を案じて、降嫁の仰せがあり、それを「心苦しくて」(若菜上、五一頁) 辞退することができなかつたと打ち明けていた。さらに紫の上への愛情が変わることはないことを言いつつ、「かの御ためこそ心苦しからめ」(同、五一頁)と、光源氏が「心苦し」と思う対象を、紫の上の前では女三宮だと言つてゐるのである。

また、このような光源氏の降嫁の説明に、「卑下したまふ」(同、五三頁) 紫の上に対して、彼は以下のように言葉

を続ける。

「あまり、かう、うちとけたまふ御ゆるしも、いかなればとうしろめたく」それ。（中略）心ひとつにしづめて、ありさまに従ふなんよき。まだきに騒ぎて、あいなきもの恨みしたまふな」と、いとよく教へきこえたまふ。

（若菜上、五三二頁）

ここで描かれる光源氏は、紫の上の立場や苦境は十分に察しているつもりであつても、その悲しみに寄り添うことなく、女三宮降嫁後の紫の上の心得について、傍線部「いとよく教へきこえたまふ」と、一方的に要請する態度をとっている。源氏は降嫁を受諾するまで、紫の上に一度も相談せず、彼女の立場がいかに心細いものとなり、深い悲しみが彼女を襲うのかについて、具体的に想像し悩む姿は描かれなかつた。源氏の心中には紫の上が女三宮ともめごとを起こさず、六条院が安泰であれば良いという程度の考え方しか、この部分から読み取ることはできない。この部分に関して『新編日本古典文学全集』は「紫の上の胸中を察していない源氏の冗舌への語り手の揶揄がこもる」と注していることからも、紫の上に対して源氏の配慮が欠けていることによつて、彼女の心を深く傷つけていることは明らかである。この源氏の言葉を聞いた後、次のように紫の上の心中が描写されている。

a 心の内にも、かく空より出で来にたるやうなることにて、のがれたまひがたきを、憎げにも聞こえなきじ、（中略）式部卿宮の大北の方、常にうけはしげなる」とどもをのたまひ出でつつ、b あぢきなき大将の御事にてさへ、あやしく恨みそねみたまふなるを、かやうに聞きて、いかにいちじるく思ひあはせたまはむ、など、おいらかなる人の御心といへど、いかでかはかばかりの隈はなからむ。今はさりともとのみわが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける世の、c 人笑へならむことを下には思ひつづけたまへど、d いとおいらかにのみもてなしたまへり。

（若菜上、五三・五四頁）

紫の上は心から驚き、自らの身の上が傍線部 c 「人笑へ」になるのではないかと思いつける。「人笑へ」とは貴族社会の人々の物笑いになることの意として用いられる言葉であるが、ここで紫の上が意識する「人笑へ」とは、具体的には六条院の寝殿に主人として女三宮が住み、彼女はそれよりも格下の対の屋に住み、これまで六条院で最高に身分の高い妻として尊重されていた立場を失い、女三宮よりも低い立場に甘んじなければならないことをさすと思われる。その理由は、傍線部 b 「あだきなき大将の御事」で示された鬚黒大将と玉鬘との結婚に関して、父式部卿宮は玉鬘が尊重されて住む同じ鬚黒邸内の片隅で、娘の北の方が体裁悪く顧みられずに住むことを「人笑へ」なこととして意識し、娘の北の方も同意して、鬚黒との別居が確定するということが真木柱巻に描かれていたからである。紫の上はこのような異母姉、鬚黒北の方の例をも思い出し、女三宮降嫁に伴つて、住まいも含めて、自己の立場が相対的に凋落することを、「人笑へ」と感じたと考えられる。

しかし紫の上は傍線部 d 「いとおいらかにのみ」とあるように、外面には決してこの苦渋を表さない。そして源氏はこの紫の上の表面的な態度に安心したのか、彼女の傍線部 a 「心の内」にある思いにまで慮ることがない。このよううに源氏は、女三宮降嫁という重大な相談を紫の上への配慮を欠いたままに終えている。

一方、『浜松中納言物語』では中納言が大将大君に皇女降嫁の仰せがあつたことを打ち明けた際に、大将大君は心中で、尼姿でありながら中納言の妻のように過してきた中納言邸での日々について思いをめぐらし、「もとより住み離れましには、劣ることかな」（卷三【五一】、一二七三頁）と、もとから別居していれば良かつたのに、承香殿女宮が降嫁によつて中納言邸に住むようになつてから、大将大君が追われるかのよう中納言邸から出て行くことになれば見劣りがすることだと考へるが、「いかがはのたまはむ」（同）と、中納言に本音を言つことはない。そして「世のつねならむにてだにも、ここに憚り給ふべき御ことにてもあらぬを」（同）と、大将大君がたとえ出家前であつても、中納言

が降嫁を遠慮する」とはないと言うのだが、この言葉に続いて「おいらかにおほどきいらへ給へる心の内しもあはれに思ひやるに」（同、一二七四頁）と、「おいらか」に答える大将大君の「心の内」までも中納言が思い遣ることが描かれている。このように、『源氏物語』では描かれることがなかつた、表面には出でいない女性の心の奥底にある苦悩までも見つめようとする男性主人公が『浜松中納言物語』において描かれていることは注目に値すると考えられる。⁽⁸⁾

三

（心内語一）において、中納言は唐后恋慕により自己の精神状態が不安定なことが降嫁に消極的になる理由であったが、（心内語二）においては、大将大君や父左大将という他者の悲哀について考へることで、いよいよ降嫁を辞退するという方向へと考えを進めていた。そして中納言の心内語の最後の部分（心内語三）及び心内語からつながる地の文において、彼が降嫁を辞退することが明確に意識されているので、この点に関して、『源氏物語』との比較のもとに考察する。

（心内語三）

「^aわが心も、行ひをし山踏みし歩かむもただ^b心に任せたらむこそ、この世の取りどころなれ、慎み繕ひてゐたらむほど、^c馴らはぬ癖はいと苦しかるべし。^d人伝てにだにあらず仰せられつるを、いかが申しやるべからむ」と、千々に思ひあまりて、女君に「かうかうのことこそ仰せられつれ。わが思ふやう」など、泣く泣く聞こえ給ふ。

（卷三【五一】、二七一・一七三頁）

ここで中納言は傍線部aで「わが心」を見つめ、傍線部dで、皇女降嫁が帝との対面時での仰せであつたため、ど

のようにお返事申し上げたらいだろうと考えている。ここには帝からの直接の仰せなのでなおさら断りにくいという心情が表れていることから、可能ならば降嫁を辞退するという中納言の判断が、ほぼ固まつたと考えてよいと思われる。

この判断の直前に考えたことが、傍線部c「馴らはぬ癖はいと苦しかるべし」であり、中納言が「苦しかるべし」と推量したことが、最終的な辞退という判断を後押しする役割を果たしている。以下、『源氏物語』の皇女降嫁に関して用いられた「苦し」について、『浜松中納言物語』の中納言の場合と比較検討し、その後「馴らはぬ癖」についても同様に検討する。

なのめならず、^aやむことなき方にかかづらひなば、何^ごとも思ふままで、左右に安からずは、^bわが身も苦しくこそはあらめ、など、もとよりすきずきしからぬ心なれば、思ひしづめつうち出でねど、^cさすがに外ざまに定まりはてたまはむも、いかにぞやおぼえて、耳はとまりけり。
(若菜上、三八頁)

この例には夕霧が朱雀院から女三宮降嫁をほのめかされた時の、夕霧の心中の思いが描かれている。夕霧の場合は正式に皇女降嫁の仰せがなされたわけではないが、降嫁によって何^ごとも自由ではなくなり、妻の雲居雁や女三宮に気を遣う生活の息苦しさが、傍線部b「わが身も苦しくこそはあらめ」という夕霧の思いに表れており、降嫁に伴う行動の制限が強く意識されている。

一方、(心内語三)の中納言の思いと比較すると、降嫁後の生活における行動の不自由さと息苦しさが意識されている点で類似しているが、中納言は「わが心」を見つめ、勤行や仏道修業のために山野を巡るなどの行動を制限することを考えて「苦し」と推量しているが、夕霧は妻、雲居雁と女三宮という他者との関わりで、「わが身」が「苦しく」なるだろうと推量しているところに違いがある。また、中納言の場合は、この降嫁後の生活を「苦し」と推量するこ

とが、直接的には降嫁辞退の判断につながっているが、夕霧は傍線部cのように、女三宮の降嫁先が誰になるかが気になつており、降嫁に興味を失つてはいない。

また、薫への降嫁に関わる「苦し」については、夕霧や『浜松中納言物語』の中納言のように、降嫁前ではなく、降嫁後において描かれている。以下、女二宮降嫁後における薫の心情について、①女二宮が宮中に住み、薫は自邸三条宮から通つていた時、②女二宮が宮中から退出し、薫の自邸三条宮で同居生活が始まった時の二点について考察する。

(女二宮降嫁後における薫の心情)

① 〈女二宮が宮中に住み、薫は自邸三条宮から通つていた時〉

心^aの内には、なほ忘れがたきいにしへざま^bのみおぼえて、昼は里に起き臥しながら暮らして、暮るれば^c心より外に急ぎ参りたまふをも、馴^dらはぬ心地にいとも憂く苦しくて、まかでさせたてまつらむとぞ思しおきてける。

(宿木、四七六頁)

② 〈女二宮が宮中から退出し、薫の自邸三条宮で同居生活が始まった時〉

かくて心やすくうちとけて見たてまつりたまふに、いとをかしげにおはす。ささやかにあてにしめやかにて、こ^eこはと見ゆるところなくおはすれば、宿世のほど口惜しからざりけりと、心おどりせらるるものから、過ぎにし方の忘らればこそはあらめ、なほ、紛るるをりなく、もの^fのみ恋しくおぼゆれば、この世にては慰めかねつべきわざなめり、(中略)寺のいそぎに^gのみ^h心をば入れたまへり。

(宿木、四八六・四八七頁)

薫は婚儀後も、先述したように夕霧が「わが身」の苦しさを考えたのとは違い、① 〈女二宮が宮中に住み、薫は自邸三条宮から通つた時〉の傍線部a「心の内」で亡き大君のことばかり考え、傍線部d「馴^dらはぬ心地にいとも憂く苦しくて」という精神状態になつてゐる。

これは中納言の（心内語三）傍線部 c 「馴らはぬ癖はいと苦しかるべし」と、「馴らはぬ」、「いと」、「苦し」が一致しており、極めてよく似た表現である。中納言の場合はこれまで誰にも遠慮せずに、（心内語三）傍線部 b 「心に任せたらむ」と自己の心の赴くままに暮らしてきたのに、承香殿女宮という高貴な妻と同居することになれば、当然、女宮への日々の気遣いが必要となることについて「馴らはぬ癖」と捉えている。また、薫の場合は昼間は自邸で亡き大君との思い出にふけり、日が暮れると、①〈女二宮が宮中に住み、薫は自邸三条宮から通つた時〉の傍線部 c 「心より外に」と自らの本心に反して、宮中の女二宮のもとに通わなければならぬことが「馴らはぬ心地」の原因とされている。

両者にはもちろん違いもあるが、中納言が（心内語三）傍線部 b 「心に任せたらむ」と、自己の心に従うことを中心じて、（心内語三）傍線部 c 「馴らはぬ癖はいと苦しかるべし」と判断したことと、薫が①〈女二宮が宮中に住み、薫は自邸三条宮から通つた時〉の傍線部 c 「心より外に」宮中の女二宮のもとに通うことを、傍線部 d 「馴らはぬ心地にいとも憂く苦しくて」と感じたことの根本をなす考えは同じであると考えられる。それはすなわち、あえて單純化してまとめるなら、「自分の本心に反して、皇女降嫁を受諾し、気遣いから心をすり減らすと、大変辛い」ということであり、このことを実体験で悟つたのが薫であり、体験する前に心中で考えて降嫁を辞退したのが中納言であると考えられる。

その後、薫は自邸三条宮に女二宮を退出させ、同居生活が始まり、女二宮を美しいと思うものの、②〈女二宮が宮中から退出し、薫の自邸三条宮で同居生活が始まつた時〉の傍線部 e 「過ぎにし方の忘られこそはあらめ、なほ、紛るるをりなく」と、宮中に通うということがなくなつても、やはり亡き大君のことが、忘れられず、その心が紛れる時はない。そして大君恋しさに、宇治の山荘を寺に改造することにのみ、傍線部 h 「心をば入れ」ことができる

のであり、薫の「心」は、女二宮を自邸に迎えても、なお大君への思いに占められている。ここでは傍線部 b・f・gと繰り返し「のみ」が用いられており、第一章で検討した（心内語一）の「浮きただよひてのみあれば」と中納言が唐后を、薫が「悲しさのみ」（宿木）と大君を思慕した心情との共通点も認められる。

それでは（心内語三）傍線部 c 「馴らはぬ癖はいと苦しかるべし」ではなく、前掲（女二宮降嫁後における薫の心情）①（女二宮が宮中に住み、薫は自邸三条宮から通つた時）の傍線部 d 「馴らはぬ心地にいとも憂く苦しくて」にはある「もの憂く」という心情は、降嫁のどの段階から薫に意識されているであろうか。

薫は帝から皇女降嫁の仰せを聞いた後、「やむ」となき方ざまに、いつしかなどいそぐ心もなし」（宿木）と、高貴な女二宮との婚儀を積極的に急ぐ気持になれないでいる点については、第一章で考察したが、このような思いは次第に「もの憂く」と意識されることが、次の例からわかる。

内裏の御氣色あること、まことに思したたむに、かくのみ a もの憂くおぼえ、b いかがすべからん、c 面だたしきことにはありとも、d いかがはあらむ、いかにぞ、e 故君にいとよく似たまへらん時に、うれしからむかし、と思ひよらるるは、f さすがにもて離るまじき心なめりかし。

（宿木、四一七・四一八頁）

ここで薫は、まだ帝のご内意の段階である皇女降嫁を、帝が本気になられた場合、自分は降嫁を傍線部 a 「もの憂く」思つてはいるので、傍線部 b 「いかがすべからん」とどうしたらよいのだろうと考えている。そして、降嫁について、社会的には傍線部 c 「面だたしきこと」であるとは思いつつも、さらに傍線部 d 「いかがはあらむ」と疑問を呈さずにはいられず、傍線部 e で亡き大君に女二宮が似ていたら嬉しいだろうと思い、それが傍線部 f 「さすがにもて離るまじき心なめりかし」に続いている。「さすがに」を用いて、降嫁への期待がないわけでもないとするのは、前掲若菜上の夕霧が傍線部 c で女三宮の降嫁先について全く興味がないわけではないということが示されたのと同じ書き

方がなされており、この段階では、まだ薫には心の余裕が認められる。

しかし、薫と女二宮との盛大な婚儀後、女二宮を亡き大君の形代として、自らの心を満たす人とはできず、婚儀後の彼の「心」は大君との思い出の地である宇治の山荘を寺に改造することのみに向いている。

以上のように、『源氏物語』の薫は降嫁前は強く「もの憂く」と思う心情を、そして降嫁後は「苦し」という心情まで抱えて、いよいよ彼の「心」は亡き大君との思い出に耽溺する方向へと進められている。一方、『浜松中納言物語』の中納言は（心内語三）において、薫が感じたような「苦し」という心情を自身は経験してもいいのに、降嫁を受諾すれば待ち受けている承香殿女宮に常時、配慮を怠ることのできない、息苦しい日常での心のあり方を「馴らはぬ癖」と考え、それを「苦しかるべし」と将来のこととして案じていた。そしてその心情を避けて、自分が本当に望むことに目を向けることで、降嫁辞退への気持ちを固めている。

おわりに

『浜松中納言物語』の中納言が承香殿女宮降嫁を受諾するか否かを悩む長い心内語には、自己の精神を見つめて、そのことが及ぼす帝や承香殿女宮への影響や、同居する大将大君や父左大将が抱くに違いない悲嘆を思い遣り、自己の精神の自由を重んじる姿勢が明確に表現されている。このように、自己や相手の心を思い遣るあり方は、中納言本人だけではなく、彼がその心の内を推測した相手の心中にも認めることができる。

それは帝においても例外ではない。帝に承香殿女宮の降嫁を辞退する意向を伝える際に、中納言は唐土ですぐれた人相見から、自らは長生きできないと占われたことを根拠にしているが、帝は表向きにはこの辞退の理由に納得して、

申し出を受け入れたように仰せになる。しかし、その「御心の内」（巻四、二九二頁）には、中納言が「しぶしぶに思ふにては、あながちに召し寄すべきにてあらず」（同）という、中納言が降嫁に気が進まないと思うのなら、無理に婿にするべきではないという、中納言の心情を尊重した思い遣りが描かれている。

このことを念頭に再度、『源氏物語』に目を転じると、様々な疑問が生じてくる。それは例えば、薫は「いとも憂く苦し」と感じて、宮中の女二宮に通っていたが、女二宮にこの心情は伝わらないはずがないのではないか、そして薫は女二宮が感じているに違いないこの心情に全く気づかず、自分自身の心の至らなさについて省みることもなかつたのだろうかという疑問である。そしてこれは『源氏物語』の読者にとって、疑問であるとともに、どうして女性の心情に気づいてくれないのかという歯がゆさをももたらす。おそらく『浜松中納言物語』の作者は『源氏物語』を熟読して、この問題点にも気づき、降嫁の栄誉よりも、自己や周囲の人の心が平安に保たれるか否かを真剣に考える中納言という登場人物に「辞退」という異例の決断をとらせたと思われる。その際、『源氏物語』で描かれた源氏や薫の降嫁受諾に伴う苦悩を踏まえながら、そこで用いられた言葉を中納言の心内語に採り入れて、降嫁辞退の意向を固めさせると、極めて周到な用意がなされている。このように『源氏物語』を細部まで踏まえながら、『浜松中納言物語』の作者が、中納言という男性像を新たに創造した意義は大きいと考えられる。

〈注〉

(1) 浜松中納言物語の本文は国立国会図書館蔵本（笠間影印叢刊34、池田利夫氏編、笠間書院、一九七一年）により作成した。なお、この本文は浜松中納言物語の会巻三分会による『浜松中納言物語』巻三注釈（九）（「日本文藝研究」第七七巻第一号、二〇一五年一〇月刊行予定）に掲載される予定である。語句の注釈についても参考されたい。なお、浜松中納言物語の会による区分番号と新編日本古典文学全集『浜松中納言物語』の頁数を付した。

(2) 坂本信道氏は「女一の宮の降嫁—『うつほ物語』求婚譚の榮華の方法と論理—」『王朝物語のために』和泉書院、二〇一二年所収。初出は「女子大國文」第一二三号（一九九三年）において、「妻ということに関して言えば、仲忠の妻にはあて宮でなく女一の宮をという設定は、物語の主人公にとって最高の榮誉であり、榮華の一端をになうものであつたと言えよう」と述べられている。『源氏物語』や『狭衣物語』においても、このように皇女降嫁を最高の榮誉とみなすという方向性は同じであり、皇女降嫁を辞退することはあり得ないという描き方がなされている。

(3) 『源氏物語』における光源氏への女三宮降嫁が、『浜松中納言物語』の皇女降嫁に影響を与えていたことについては、宮田和一郎氏「浜松中納言物語」（『物語文学攷（平安時代）』文進堂、一九四三年）、森岡常夫氏「浜松中納言物語の研究」（『平安朝物語の研究』風間書房、一九六七年初版、一九八一年増補版）などによつて指摘されている。

(4) 『源氏物語』における薰への女二宮降嫁が、『浜松中納言物語』の皇女降嫁に影響を与えていたことについては、西本寮子氏「浜松中納言物語」における皇女降嫁」（『国文学攷』一二六、一九八七年）に指摘がある。また、『浜松中納言物語』の中納言への皇女降嫁の帝による仰せに関する表現、「殿上に源中納言参り給へり」と聞こし召して、「こなたに」（巻三【四五】、二六三頁）が、『源氏物語』宿木巻の薰への女二宮降嫁の表現に類似していることが、『源氏』宿木でも薰の「源中納言」が殿上の間にいた折、「こなたへと仰せ言ありて」女二宮降嫁が御門よりほのめかされ（以下略）と『新編日本古典文学全集』の一七三頁上段の鑑賞・批評の項で指摘されている。

(5) 『浜松中納言物語全注釈』（中西健治氏、和泉書院、一〇〇五年）の【評】（七七二頁）では、この心内語について「思考の過程

はまことに迷路のようであるが、根底の思いは降嫁を拒否すると云うところにある。（中略）「わが思ふやう」ということは、帝の御意向に背く考え方のあることを、すでに示唆している」とし、「ここに皇女降嫁辞退の意向が認められることを指摘されている。

このように中納言の皇女降嫁辞退を考える上で重要な意味を持つ中納言の心内語であるが、西本寮子氏は注（4）論文において、中納言の辞退時の言葉については考察されたが、降嫁辞退を表明するよりも前の段階で描かれているこの中納言の心内語の持つ意味については、着目されず、この点に関しての検討はなされていない。

（6）源氏物語の引用は、新編日本古典文学全集『源氏物語』により、頁数を記す。一部、表記を改めた。

（7）新編日本古典文学全集『浜松中納言物語』の「散逸首巻の梗概」も参考にしてまとめた。

（8）本稿のように『源氏物語』の文章との比較から導き出された結論ではないが、中西健治氏注（5）前掲書の【評】（七七二頁）において、「周囲の人達の思いにまで心を及ぼしていくことは浜松にはよく見られるところである」と述べられている。

（本学大学院研修者）